

上腕骨外側上顆炎の病態と治療

上腕骨外側上顆炎は日常の整形外科診療においてよく遭遇する疾患である。したがって上腕骨外側上顆炎は日本整形外科学会監修の診療ガイドライン 16 疾患，外傷のうちの一つである。『上腕骨外側上顆炎診療ガイドライン』の初版は 2006 年であるが，2019 年に改訂第 2 版が出版された。

上腕骨外側上顆炎は手関節伸筋群の中で短橈側手根伸筋（ECRB）の付着部症と定義されているが，保存療法に抵抗し手術療法に至る例では，腱付着部症以外に関節内の病変が関与していることは疑う余地がない。すなわち関節内の滑膜炎，腕橈関節に存在する滑膜ヒダによる障害，腕橈関節の退行性変化，輪状靱帯周囲の障害などである。難治例においてはこれらの病変の関与も念頭において治療にあたることが重要である。したがって今回の特集では病態に重点をおいて上腕骨外側上顆炎の診療にあたってこられた先生方に執筆をお願いした。

青木光広先生には肘関節の機能解剖と上腕骨外側上顆炎の病態に関する解剖所見やバイオメカニクスについて述べていただいた。大歳憲一先生には疫学と保存療法の実際について述べていただいた。上原大志先生には手術前後の MRI 所見について述べていただいた。

鈴木 拓先生には第 2 版ガイドラインでも取り上げられた PRP（多血小板血漿）療法の実際の方法や治療成績について述べていただいた。落合信靖先生にはいまだに賛否両論の治療法である体外衝撃波の治療成績について述べていただいた。

また保存療法が奏功しない例では手術療法の適応となってくるが，今田英明先生と副島 修先生には直視下手術の方法，手術成績，手術所見からみた病態について述べていただいた。また織田 崇先生には関節鏡視下手術所見からの病態や再発例について述べていただき，村田景一先生には直視下手術，鏡視下手術の治療成績から病態についても述べていただいた。

『上腕骨外側上顆炎診療ガイドライン』と今回の特集を照らし合わせて，日常の診療の一助としていただければ幸いである。

最後に，ご多忙の中でご執筆いただいた諸先生に深謝を申し上げる。

（新井 猛）